売れる特許翻訳をめざして

北村　忠治

特許翻訳を始めてから２０数年になりますが、前川さんから、特許翻訳で経験したことを何か書いてほしいとご依頼がありましたので、大阪工業英語研究会には部外者の私ですが、特許翻訳について日頃感じているところを申し述べたいと思います。

特許文書は難解か

一般に、特許英語は難解と思われているようですが、これは、一見そのように見えるだけで、一旦慣れてしまえば、さしたることも無いと思われます。多分、難解と思われている理由は、クレーム文が１センテンス（ピリオドが一つ）で書かれることと、特許独特の表現が多用されることと、長いセンテンスが多くみられることにあると考えられます。しかし、問題は、そのような特許文書に興味を持てるかどうかにあります。

ところで、英訳する立場からいえば、日本語で書かれた明細書が分かり易いかどうかが問題です。特許翻訳（英訳）において最も苦労するのは、日本語明細書の中で意味の判断しにくい文章に出会ったときです。しかし、これは技術翻訳全般の問題でもありますので、問題の指摘のみに止めておきます。

充電が必要

特許翻訳を志した当初２年ほどは、ただがむしゃらに仕事をしました。しかし、仕事に慣れるに従って、次第に、はたしてこれでよいかという疑問がつのってきました。いま一つ、自分の仕事に自信というか、満足感が持てないのです。そこで、仕事を少し手控えて、ときどき図書館に通って、種々の分野の米国の明細書のコピーをとって、表現の収集を始めました。これが非常に役立ちました。面白い表現法や文章構成法に出会い、良い文章とはかくあるべきもの、という実感を得ました。そして、このときに悟ったことは、時々の充電をしないことには、いかに辞書を揃え、また仮に文法的に誤りのない文章を書けたとしても、所詮味のない文章しか書けないということです。

この充電法は、今も実行しています。少しくらい仕事を手控えても、それだけの値打ちはあると思っています。

私の学習法

英語の文章と日本語の文章との間に発想の違いがあることは言うまでもありませんが、両者を相互関連的に捉えることは可能だと、私は思っています。だから、私は、日本語の文章が上手な人は英語の文章も上手に書ける筈だと考えます。これは、私の信念と言ってもよいほどです。現に、私が特許英語を教えているスクールでの受講生についてみても、そのような傾向が指摘できます。

そこで、私は、英語の文章を読む（または日記にする）ときには、平行的に、その中で出会う表現を英訳の際にいかに利用するかを考え、英訳の際に、原文である日本語の文章中の表現を、日訳の際にいかに利用するかを考えることを自ら習慣づけています。ただ、個々の表現には、文章の中でそれを用いるのに適、不適のシチュエーションがありますので、用いるシチュエーションを誤らないことが必要なことは言うまでもありません。そして、私は、私の受講生にも、この方法を推奨していま

す。

また、私自身が効果があったと思われる学習法としては、英語文献の多読、精読のほか、部分読みの場合には、その前後のパラグラフをも読んで、なるべく正しい文脈で読むようにすることです。このようにすることによって、近視眼的な読み方を避けることができると思います。

特許表現に親しむ

いろいろの特許表現に慣れて、それらを実際の翻訳に活用しているうちに、私は、次第に特許表現に魅せられてゆきました。そうした表現の数例をしめしますと、例えば、次のようなものがあります。いづれも米国の企業または個人の米国特許の明細書からの抜粋です。

The retaining members 20 are transversely arranged between the longitudinal members 14 in adjacent relationship to one another.
（保持部材２０は縦部材１４間に横方向に互いに隣接させて配置してある。）

Support member 22 is pivotally attached by shaft 50 to mounting bracket 48 for rotation about a generally horizontal axis.
（支持部材２２は、シャフト５０により取り付けブラケットに揺動可能に取り付けられ、ほぼ水平の軸線に沿って回転するようになっている。）

Each stator vane is spaced circumferentially from the adjacent vane.
（各固定羽根は、隣接羽根に対し周方向に間隔を置いて位置させてある。）

The bottom part of the rocker arm 22 is arcuately shaped at 33 to provide an arcuate race with raceways 34 and 36.
（ロッカーアーム２２の底面部は、符号３３の箇所が円弧状に形成され、溝３４、３６を備えた円弧状レースを形成している。）

これらは、ほんの一例に過ぎませんが、以上の例からも散見されるように、特許英語では、形容詞に ly を付けた形に分詞を伴った表現が多用されます。このような表現は、英文ワープロのスペルチェックや文法チェックでは、誤用とされる場合もおおいと思われますが、現実に高い頻度で使用されており、そのような表現が私は堪らなく好きです。

特許英語のリズム感

リズム感のある文章は、文学の世界のみに限らないと思います。一般工業英語分野でも、特許英語でも、分かり易く、読みやすい文章にはリズム感があると、私は思っています。ここで、分かり易く、読みやすい文章とは、例えば翻訳文についていえば、原文の意味を正確に把握していて、かつ文法的誤りのない文章をいうこととします。文法的誤りがあったり、表現の使い方が適切でない英文は、どこかギコチなく、スムーズさが欠けています。

私は、自分の書いた英文をチェックする方法として、訳抜けや文意の取り違えのないことを確認した上で、訳文を音読することにしています。スムーズに読めない場合は、どこかが間違っています。私の経験では、例えば、副詞、副詞句の位置、前置詞の位置、不定詞の誤用（意味上の主語の問題）といったことです。このような文法上の間違いは、翻訳の課程で無意識のうちに生じがちなものです。

また、文接続の巧拙も、文章の調子に大きな要素を占めます。例えば、so that; such that; 分詞構文（クレイム文の場合は、動詞構文）、関係詞をいかにうまく活用するかも大切な要件でしょ

う。
私は、数多く集めた米国特許明細書の中から、特に文章的にすぐれたものを選んで、いつでも参照できるように身近な場所に収納しています。このようにしておくと、非常に安心です。

不定冠詞、定冠詞と単数、複数

冠詞の問題は、われわれ日本人翻訳者には共通の弱点だと思われます。特許分野では、クレーム文や実施例の説明箇所では、初出の物（例えば、装備や部材）には不定冠詞を付し、それ以後は、定冠詞を付けるという風に定義づけられています。しかし、物によっては、それが単数か複数か明確でない場合、どちらに解釈するかは、難しい問題です。例えば、車輪が転動する“レール”という部材の場合、“一対の”という限定がなされている場合はよいのですが、その限定がない場合が問題なのです。
一本のレールの場合もないとはいえないからです。また、実施例や図面では、複数になっていても、主クレームでは単数である場合がよくあるからです。主クレームのなかで、一旦複数で表現しますと、範囲が限定されて、あとで単数であると主張できなくなります。サブクレームの中で、それが複数である場合を定義している場合や、詳細な説明の項の末尾で、単数の場合もありうることを断ってある場合は、当然主クレームでは単数です。
このように、単数か複数か判断に迷う場合は、私は、躊躇なく、単数で書くことにしています。クレーム中で、単数（a: an）は複数の場合を含むという暗黙の了解があるからです。常識ではこうだとか、実施例ではどうだとかは、余り考えないほうが無難だと思います。
この単数、複数の問題は、私は、ずっと以前に苦い経験をしたので、未だに切実な記憶となって脳裏によみがえってきます。

使用する辞書

良質の翻訳を志す以上、一般的辞書のほか、技術関係の辞書、参考書類は欠かせないツールでありますので、翻訳の仕事を始めた当初から、私は、毎年３０ー４０冊程度の辞書、参考書を集めてきました。いくら集めても際限がないとは、思いながら、未だに店頭で見てこれはと思うものは、買い求めています。仕事の分野により、５、６冊から３０冊程度を参照しますが、いかに新しい辞書でも、最新の技術をカバーしきれる辞書はないようです。そんなとき、図書館で集めた特許文献が役に立ちます。
また、使用頻度の高い辞書に、普段書き込みを励行していますと、案外に役立つ事が多いようです。
辞書の種類としては、一応項目ごとの説明文のあるものと、語彙の豊富なコンコーダンス式のものとを揃えるようにしていますが、そのほか見出し語の下に、その語を付した関連用語を列記したものが便利だと思います。説明文のある辞書は、技術内容把握のために使いますが、技術屋でない私には説明が高等すぎたり、詳細すぎたりして、さっぱり分からない場合が多くて困ります。そんなとき、英英技術辞書を参照すると、すんなりと理解できるから妙です。専門外のものにも分かるように説明が書かれています。この点などは、日本の専門辞書にも見習ってほしいものです。

おわりに

　以上、思いつくまま、断片的なことどもを書き連ねましたが、言わずもがなのことまで書いたような気もします。ご容赦願います。なお、前川さんから送っていただいた OSTEC ジャーナル創刊号拝読しましたが、その中で森本洋平氏の文章は興味深く、特に、“木を見て森を見ない”とそれ以降の箇所、同感する点が多々ありました。